

ロスアンジェルス開催芸術イベントに見る NPO 活動
- ファンドレイジングの実際と留意点 -

日本政策投資銀行
ロスアンジェルス事務所
2 0 0 3 年 2 月

要 旨

1. 近年芸術の商業化が懸念されているが、それとは無縁の有志が、行き詰まりが懸念される西洋文化に対してアジアの文化や芸術を世界に向けて発信すること、隠れた才能を発掘すること、を目的に毎年開催されている芸術祭がある。今年10周年を迎えたその芸術祭は、“Lantern of the East”(ランタン・イ - スト)と称する。日本人画伯坂田英夫氏を含むアジアの芸術家4人が始めたこの催しは、10年目の開催地を人種のるつぼと言われるロスアンジェルスを選んだ。行政の財政面での支援が期待できるアジアと異なり、今回の催しは、運営面ではボランティアにより資金面では寄付金(ファンドレイジング)により全て賄われた。本レポートは、当イベントに共感したLA在住の日本人を中心としたNPOの、運営面や資金面での奮闘を記したものである。
2. 2002年ランタン・イーストは、9月から11月にかけて、海外からの参加者を含む二十数名の芸術家が、一ヶ月間寝食を共にした地域住民と交流しながら制作活動を行う「アートキャンプ」、キャンプ参加者を含む31カ国138人の芸術家の作品展示、参加アーティストが現地学校を訪問し、実地指導や交流を図る、という文化イベントであった。こうした一大文化イベントを支えたのは、LA在住の日本人ボランティアである。坂田画伯が、当イベントの理論的・精神的な支柱であり、また芸術家の選定や期間中のケアを行う中心人物であるが、運営面での中心は、LA地区でコンサルティング会社を運営する若尾龍彦氏である。若尾氏は、「ランタン・イースト」の意義とともに多くの人種が共存するLA地区で多くの国から参加するという構図に大いなる意義を感じ、全面的な協力を踏み切った。NPO“USJRF”(日米友好基金)が設立され、LA地区を代表する多くの有力な日系人、日本人が参加した。
3. このNPO活動を振り返ってみると、運営面や資金収集面で全てボランティアで行うやり方は、試行錯誤の連続であり、当初描いた見通し通りとはいかなかった。日本企業現法の寄付が殆ど集まらなかった。景気の影響が大きいのが、時間の制約もあり企業が内部説明するに足る理屈を十分に準備できなかった。企業の担当者がこだわった点は、イベントの意義、米国現地法人として寄付することの効果、ロスアンジェルスで毎年開催されるのか否かの継続性の問題等である。また、地元自治体からの資金協力は全く得られなかった。米国では、文化に対する政府の関与は、PR等の面では有り得ても、資金的には馴染まない。米国では民間ファンドが多く存在するが、東洋の文化・芸術の紹介に力点を置く趣旨のなかで米国ファンドをどう説得するか、という課題もあった。

芸術家は多くの国から参加者があったにも拘わらず、今回のイベントでは運営面での参画を殆ど得られなかった。特に、発起人国で最多開催国であり、また日系人を上回る現地コミュニティがある韓国人の参画を得られなかった。期待していたLA在住の韓国人芸術家が、所用で長期間LAを離れていたという不運もあった。また、参加した芸術家達にもある程度の運営協力を期待したが、理解を得るのに時間を要した。

4. 一方、予想以上の支援としては、何よりも日本人ボランティアの協力である。協力者は50人にも上り、資金収集を含めた多くのイベント運営を手掛けた。ただ、多忙を極めた。これだけの規模のイベントを実行するには最低2人の専従が必要であった、との反省がある。また、ある印刷会社は5000ドルを上回るパンフレット印刷代分を寄付した。裏千家の飯沼信子氏は、ファンドレイジングの為にお茶会開催を通じた寄付を行った。州政府やLA市の首長や各国LA総領事を始めとするビッグネームがサイン入りの祝辞を寄せてきたが、これは資金協力の説得材料としても大きな効果があった。ただ、これがより早期に入手できれば効果的であったとの反省が伴う。大口の企業寄付は集まらなかったものの、小口の企業や個人からの寄付はある程度積み上がった。寄付を考える際日米の税制は常に比較される。米国の方が、かなり容易に所得税控除となりうる。

5. 米国ではNPOが多く存在し、ボランティア活動も盛んである。NPO活動にはボランティアとならんでファンドレイジング(資金収集)が不可欠であり、最も力が注がれる部分である。「資産があるあるいはお金を集める能力のある者」がNPOの理事としての不可欠な条件である。寄付提供者は、約8割が個人と圧倒的で、財団の存在も大きい。寄付金の使途としては、宗教、教育、社会事業等が大きいウェイトを占めるが、運営形態としてNPOや財団である場合が少なくない。アメリカでは各州が強い自治権を持っており、コミュニティが地域を司る「小さな政府」であるため、個人がコミュニティの為に寄付をする事は特別なことではない。また、寄付は税控除となりうるため、金銭のみならず物でも寄付として「提供」する。財団は他のNPOや財団に寄付する。NPOは、そうした助成金を受け取るために、申し込み書作成に心血を注ぐ。大学運営に関しても、ファンドレイジングは重要な役割を果たしている。学長や教授の任務の多くは寄付金集めである。また自ら財団を設立し、安定的な財的基盤を構築している例も少なくない。

6. 手詰まり感のある我が国の地域振興を考える際、地域が持つ伝統文化や芸能を見直し利用すること、また文化に理解のある地域として定期的なイベントを開催することが、その方策としてありえよう。これは、外国人旅行者を呼び込む上でも有効と考えられる。米国では、日本食レストランは隆盛を誇っている。ロスアンジェルス日本食レストランを紹介している英語版ホームページには、月20万もの訪問者がある。日本アニメは高い評価を受け、2002年12月には週刊コミックの英語版の定期発行も始まった。LA地区では、能、狂言等の講演は盛況で、茶道、華道等にも注目が集まっている。

一般に、文化イベントの運営に関し、途上国では政府や自治体は有力な資金提供者である。先進国である米国は、文化は人が創造するものという理念の下で、ボランティア活動やNPO主催の集金収集の果たす役割が大きい。日本は、文化活動に関しては資金面を主に政府の役割が大きい。但し、財政上の問題や人々の意識変化を背景として、ボランティアやドネーションの役割は高まっていくことになる。2002年「ランタン・イースト」は、ボランティア精神をもった普通の人が、政府の資金補助無しで一大文化イベントを支えた一つの事例である。情熱やリーダーシッ

ブをもったキーパースンの存在、イベントの意義のアカウンタビリティ、寄付税制に係る考え方の整理、政府の効率的な支援方策等、今後の我が国地域社会活性化を考える際に参考となるものと思われる。

日本政策投資銀行 ロスアンジェルス事務所
山川光子、山家公雄

目次

| | |
|---|------|
| はじめに | P.5 |
| 第1節 10周年を迎えた芸術祭“Lantern of the East”(ランタン・イ - スト) | P.8 |
| 1. “Lantern of the East”(ランタン・イ - スト)の概要 | P.8 |
| 2. “Lantern of the East”(ランタン・イ - スト)の経緯 | P.8 |
| 【ランタン・イースト事始め】 | |
| 【ランタン・イーストの歴史】 | |
| 3. 2002年のLantern of the East | P.9 |
| 【芸術イベントの概要】 | |
| 【ロスアンジェルス開催の意義と理念の重要性】 | |
| 第2節 2002年ランタン・イ - ストに見るNPO活動 | P.13 |
| 1. 運営の主体はNPO | P.13 |
| 【坂田画伯と若尾氏がNPOの中心】 | |
| 【NPO、USJRFの設立の経緯】 | |
| 2. ファンドレイズの実践(その1、イベント編) | P.14 |
| (1). イベント開催前 | P.14 |
| (2). イベント開催後 | P.14 |
| 3. ファンドレイズの実践(その2、手法編) | P.15 |
| (1). 寄付 | P.16 |
| (2). その他 | P.17 |
| 【ラジオ】【テレビ広告】【ポスター、カタログ及びパンフレット】 | |
| 【ポストカード】【印刷代】 | |
| 4. 収支バランス及びスポンサー形態 | P.18 |
| 5. ランタン・イ - ストにみるNPO活動の留意点 | P.22 |
| 【期待通りにいかなかった点】 | |
| 【予想以上の支援を得た点】 | |
| 第3節 米国におけるNPO活動と寄付 | P.25 |
| 1. 特徴 | P.25 |
| 2. ファンドレイジングの資金源と用途 | P.25 |
| 【個人】【財団】【教育】 | |
| 3. NPO設立の申請 | P.28 |
| 4. 米国NPO活動を考える際の留意点 | P.29 |
| 終わりにかえて | P.30 |
| 【文化イベントに見る日米韓間の比較 地域・政府との関わり合い】 | |
| 参考資料 | P.32 |

始めに

2002年10月4日夕刻より、ロスアンジェルス市リトル東京のホテル・ニューオータニ、ボール・ルームにおいて、芸術イベント「Lantern of the East(ランタン・イースト)」ロスアンジェルス大会に参加する各国の芸術家達に対する歓迎レセプションが開催された。併せて参加作品やテーマ音楽のオークションが行われた。名誉会長である元南加州日本商工会議所会頭の金井紀年氏の挨拶に始まり、日本およびグアテマラ政府総領事の挨拶、加州グレイ・デービス知事やジェームス・ハーンロスアンジェルス市長のメッセージが披露された。参加芸術家を含めて総勢200人の参加をみたが、各テーブルには参加芸術家が同席しており、歓迎者との会話が弾む。著者のテーブルには、LA在住のインド人と韓国人の女性芸術家が同席していた。

会食している間、舞台では国際都市ロスアンジェルスに相応しく、各国の伝統芸能が次々と披露されていく。日本人女性による琴演奏に始まり韓国と中国の伝統舞踊、ブルガリア男性ソプラノ歌手の熱唱、アルゼンチンカップルによる情熱的なタンゴと続く。そして最後を飾ったのは、日系米国人を主とした地元愛好会による和太鼓演技で、会場が大きくどよめいた。前半は赤と白の衣装を身にまとった女性3人が前面に出て、激しいアクションを伴う迫力ある演技・演奏が行われ、後半は一転してお祭を思わせる明るい調子で演技者も爽やかな笑顔を浮かべて軽快に太鼓を叩く。「これは何という音楽か。」同じテーブルのインド人女性より解説を求められる。

歓迎夕食会は、各国伝統芸能の披露の後、参加芸術家の舞台登場でハイライトを迎える。まず、今回で10周年を迎える当イベントの発起人である4人の芸術家が舞台に登場し、代表して日本の坂田画伯が挨拶する。ボランティアへの感謝表明を主とする簡潔な言葉だ。その後、参加芸術家全員が舞台に上がり、会場に手を振った。最後を締めくくったのは、当イベントの一切の運営およびファンドレイジングを取り仕切ったボランティア団体の代表、若尾龍彦氏であり、坂田画伯始めとする発起人たちの情熱、ボランティアや参加者への感謝、イベント運営の興奮と若干の苦労話などを披露された。

近年芸術の商業化が懸念されているが、それと無縁の有志が、行き詰まりが懸念される西洋文化に対してアジアの文化や芸術を世界に向けて発信すること、商業化のなかで埋もれている才能を発掘すること、を目的に毎年開催されている芸術祭がある。今年10周年を迎えたその芸術祭は、「Lantern of the East(ランタン・イースト)」と称する。日本人画伯坂田英夫氏を含むアジアの芸術家4人が始めたこの催しは、10年目の開催地を人種のつぼと言われるロスアンジェルスを選んだ。アジア以外での開催は、ロスアンジェルスだけであるが、行政の財政面での支援が期待できるアジアと異なり、今回の催しは、運営面ではボランティアにより資金面では寄付金により全て賄われた。本レポートは、当イベントに共感したLA在住の日本人を中心としたNPOが、運営面や資金面での奮闘振りを記したものである。レポートを纏めるに際し、著者は、この芸術祭が催した各種イベントに

参加し、またボランティアや参加芸術家にも若干のインタビューを行った。

第1節では、NPOが活躍する場となった「ランタン・イースト」の概要について、これまでの歴史をも踏まえて、記述している。第2節では、NPOの活躍について、資金収集（ファンドレイジング）を中心に、イベント開催の視点および各種手法の視点から紹介する。また、「ランタン・イースト」にみるNPO活動の留意点について、期待通りにいかなかった点および予想以上の支援を得た点、に分類し整理した。第3節では、米国全体としてのNPO活動とその特徴について、特にファンドレイジングが非常に重要であることを主に概観している。寄付活動のメインプレーヤーである「個人」「財団」「教育」に焦点をあてた解説も試みている。「終わりに代えて」では、ランタン・イースト主催者が感じた文化イベントに見る日米韓間の比較を紹介するとともに、文化イベントとNPOの関わりあいについて我が国への示唆を考察する。



ランタン・イースト、キックオフ・パーティ(ドイザキギャラリー)



ランタン・イースト、エキシビション(展示、ドイザキギャラリー)

第1節．10周年を迎えた芸術祭“Lantern of the East”(ランタン・イースト)

1.“Lantern of the East”(ランタン・イースト)の概要

Lantern of the East(ランタン・イースト)は、趣旨に賛同するアーティストがアジアを主に世界から集まり、創作活動から展示までを行うユニークな芸術イベントである。ロスアンジェルス在住の日本人画家坂田英夫氏を含む4人の芸術家による呼びかけにより創設され、開催されてきている。作品の展覧会が約1ヶ月、アートキャンプ参加者の創作活動期間が約1ヶ月、合わせて2ヶ月間のイベントであるが、資金収集を目的とした関連イベントを含めると約5ヶ月に及ぶ。1996年から始まったこのイベントは今年で10回目を迎える。これまで韓国、日本、インド等で行われている。ロスアンジェルスは2回目である。

今回の開催例を基に具体的に説明すると、最初の1ヶ月間に、在米アーティスト10数名の他、ランタン・イースト主催アーティストや主催者が招いた10名を加えて、4週間寝食を共にしながら創作活動を行う。これは「アートキャンプ」と呼ばれる。次にアートキャンプで創作された作品を1ヶ月間に渡って展示する。展示される作品はアートキャンプで創作された作品だけではない。合わせて世界31カ国からアーティストが参加し、138のアートが展示される。その間、アーティストの創作を見学する時間を設けたり、アーティスト達が子供と共に創作をする等の交流の時間がある。単なる展示だけではなく、アートキャンプやアーティストと開催地コミュニティとの交流が、大きな特徴となっている。

もう一つの特徴としては、参加するアーティストは、芸術分野あるいは商業的な面での成功によって選ばれた人達ではないという点である。コンテストで入賞した実績や名声でなく、純粋に芸術作品の素晴らしさが選考基準となっている。結果として無名のアーティストもいるが、普段広告や美術展といったとすれば営利の絡んだ場で接触することが多い人にとっては、幅の広さ底の深さを知る絶好の機会である。また、自分自身の目で、感覚で、純粋に芸術の素晴らしさに触れる機会でもある。

2.“Lantern of the East”(ランタン・イースト)の経緯

【ランタン・イースト事始め】

上記でも触れたように、ランタン・イーストは、営利目的のイベントではない。現代芸術界の商業主義を憂慮する Lee Kye Song 氏(韓国)、P. Khemraj 氏(インド)、坂田英夫氏、上条陽子氏という4人のアーティストによって始められたものである。

坂田氏は1986年にニューヨークの Metropolitan Museum で開催された「20世紀の巨匠展」で、東洋人の作品が皆無に等しいのを目のあたりにし、衝撃を受けた。長く米国で生活している同氏は、日頃物質文明中心の米国あるいは西洋に対して疑問を持つことがあり、東洋の持つ豊かな精神文化がより見直されるべきと考えていた。「20世紀の巨匠展」

を見た際、東洋文化・芸術を西洋の現代芸術に吹き込むことの必要性を痛感したという。Lantern of the East (東からの光) というネーミングもここに由来する。

こうした思いを含め価値観を共有する4人の芸術家は、国境を越えて親交を継続し具体的に活動をする機会を窺っていた。1993年に、Lee氏が呼びかける形で、第一回のランタン・イーストが韓国で開催された。

【ランタン・イーストの歴史】

前述の通り、ランタン・イーストは今年ロスアンジェルスでの開催で10回目を迎える。10回のうち韓国で6回、ロスアンジェルスで2回、インドで1回、日本で1回と、韓国での開催が多い。第1回は、韓国、日本、アメリカ、インド、中国の5カ国が参加したに留まったが、回を重ねる毎に参加国は増え、今回は31カ国にも上った。第1回は、1996年に韓国のPyong Taek市で開催された。これは、Pyong Taek市主催のイベントコンペに、Lee Kye Song氏がアイデアを応募し、それが採用され実現をみたものである。日本では、1998年に立川市で第6回が開かれている。ロスアンジェルス開催は今回で2回目であるが、前回はロスアンジェルス郡北部海岸地帯のマリブを中心に行われた。

3. 2002年のLantern of the East

以下、2002年大会の概要について解説する。表1は、主要なイベントを時系列で示したものである。

【芸術イベントの概要】

2002年ランタン・イーストは、9月から10月にかけてロスアンジェルスにて開催された。これまでの例にならい、海外からの参加者を含む十数名の芸術家が、一ヶ月間寝食を共にした地域住民と交流しながら制作活動を行う「アートキャンプ」、キャンプ参加者を含む31カ国138人の芸術家の作品展示、参加アーティストが現地学校を訪問し、実地指導や交流を図る、という文化イベントであった。

表1．2002年ランタン・イーストのイベント日程

| 日程 | イベント(場所) | |
|------------------|---|--|
| 5月6日 | 「キックオフ・パーティ」 日米文化センター内、ドイザキギャラリー | 開催主旨説明と記者会見。アーティスト出身国の料理を提供。各国のパフォーマンス。 |
| 6月29日 | 「バーベキューパーティー」 コロンビアパーク | ファンドレイジングとボランティア募集が目的のイベント |
| 8月3日 | 「夕涼みのお茶会」 裏千家飯沼信子先生のご自宅 | チャリティーが目的のイベント |
| 8月31日 | 「アートキャンプ・キックオフ・パーティ」 エンジェルズゲート・カルチャーセンター | 各アーティスト出身国の料理やバーベキューを楽しむパーティー。ドネーションチケットも用意。 |
| 9月2日～ 9月27日 | 「アートキャンプ」 エンジェルズゲート・カルチャーセンター | 創作現場が見学可能な日を設け、アートに触れる機会が作れるよう工夫。 |
| 9月7日 | 「ゴルフトーナメント」 レクリエーションパークゴルフクラブ | ファンドレイジングが目的のイベント |
| 9月15日 | 「オークション」 アーティストダイアナ女史のスタジオ | ファンドレイジングが目的の作品オークション。 |
| 9月22日 | 「アートデイ」 エンジェルズゲート・カルチャーセンター | 一般や子供を対象にアートキャンプを開放。実際にアーティストと絵を描く交流もあった。 |
| 9月28日～ 10月27日 | 「エキシビション(展示)」 エンジェルズゲート・カルチャーセンター | 展示期間中はアーティストが会場にいるようにし、来客者とのコミュニケーションが取られるよう工夫。また、アートを目指す学生の為のフォーラムも開催された。 |
| 10月4日～ 10月30日 | 「エキシビション(展示)」 カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校 ファインアートギャラリー | |
| 10月5日～ 10月30日 | 「エキシビション(展示)」 ドイザキギャラリー | |
| 10月4日 | 「オープニングセレモニー」 ホテル・ニューオータニ | 日本総領事他各国の総領事が出席し、様々な国の文化催しも行われた。 |

【ロスアンジェルス開催の意義と理念の重要性】

ランタン・オブ・ザ・イーストは、イベントを成功させた人たちによる様々な意義によって支えられた。

今回は第10回目で節目となるが、その記念すべき開催地としてロスアンジェルスが選ばれた。これには複数の理由が考えられる。坂田画伯の居住地であり、多くの民族が居住し当イベントの精神を共有する芸術家が多い地区である。LA地区には、芸術家村と称することが可能な地区が3ヶ所存在するが、このような事情が背景としてある。更に広い視点で、あらゆる民族、あらゆるコミュニティがお互いの文化を尊重しあって生活している。現在ロスアンジェルスの150カ国以上の言語が話されているという。ランタン・イーストは、回を重ねる毎に東洋という枠から、その精神を維持しながら、世界規模に広がってきている。ロスアンジェルスは文化や人種の違う人々が集いながら、対立するのではなく調和を保って暮らせるかという観点で、未来の実験都市とも言える面があり、10周年の開催地としての意味を有しているのである。

参加アーティストの多くは意識の変化を感じたと語っている。自分であるいは画商を通して個展を開き友人知人に作品を見てもらう、という従来のスタイルから離れ、アーティスト自らがイベントに参加し成功したという実感をもった。また、普段は「一匹狼」として活動し芸術家同士で集う機会が殆ど無い彼らにとって、芸術家同士のネットワークを広げる場が持てるという意義も大きい。

当イベント創始者の一人である韓国人アーティストのLee Kyson氏は、「人は皆アーティストであり、芸術に限らず何かについて極める為に邁進することはアートである。」という意義を尊重している。ボランティアや見学者を含めた多くの参加者がこうした意義を感じるとしたら、それも無視できないものであろう。

イベントを支えるしっかりとした理念は、ボランティアを募る上であるいは資金集め(ファンドレイジング)を実施するに際し、不可欠な要素となっている。主催者やボランティアへのインタビューでは、このような意義に共鳴して参加した、という話が多かった。また、結果的には在LA日本人(日系人)が主体となったが、海外で日本人が世界芸術祭という大イベントを立ち上げたという事に大きな意義を感じたと、いう方もいた。



ランタン・イースト、アートキャンプ(エンジェルズゲート・カルチャーセンター)



ランタン・イースト、アートキャンプ(エンジェルズゲート・カルチャーセンター)

第2節 2002年ランタン・イーストに見るNPO活動

1. 運営の主体はNPO

【坂田画伯と若尾氏がNPOの中心】

この芸術祭の運営の中心は、発起人の一人である坂田英夫氏、Wakao & Associatesの若尾龍彦氏である。坂田氏は主に芸術家達の取りまとめ役・世話役を担った。10年の歴史を有するランタン・イーストは、その趣旨に添ったアーティストを選択するノウハウを着実に積んできた。アジアを主に各地から適当な芸術家が推薦され、坂田画伯を始めとする主要メンバーが選考する。もちろん、主要メンバーが日頃付き合い合っているなかで、見込まれて参加を依頼されるアーティストもいる。作品による参加とアートキャンプへの参加も本人の希望を聞きながら決まっていく。ロスアンジェルスに到着後の世話も、坂田画伯が主となって行った。坂田氏は、アートキャンプにも参加し、キャンプ参加者のケアも行っている。

一方、若尾氏は、イベント運営や資金集めを行うNPOの実質責任者である。坂田氏とは長年の友人であり、坂田氏の芸術にかける情熱と、記念すべき10周年イベントがロスアンジェルスで開催されることに意義を感じ、草の根支援を決意したものである。NPOの創設からボランティアの組織、賛助メンバーおよびスポンサーの募集、有力者への支援要請、各種ファンドレイズ・イベントの考案等を行う際の中心となった。LA地区在住の日本人・日系人を中心に、50名ものボランティアが集まった。地区毎にあるいはイベント毎にグループ化し、専従無しの中でインターネットを利用して連絡を取りあった。

この運営団体の受け皿として、支援実行委員会が組織されるとともに、資金収集を目的にNPOである“U.S. Japan Relationship Fund Inc.”(USJRF、日米友好基金)が創設された。支援実行委員会の名誉会長には、元南加州日本商工会議所会頭の金井紀年氏が就任したほか、多数の著名人が名前を連ねた。また、USJRFは、寄付金の税金控除が可能となるNPO団体として州政府の認可を受けている。これは、ファンドレイズ活動をする際に大きなメリットとなる。

【NPO、USJRFの設立の経緯】

NPOであるUSJRF(U.S. Japan Relationship Fund Inc.)は、今回ロスで行われたランタン・オブ・ザ・イーストの運営と資金面を全面的にサポートした。当NPO設立のきっかけとなったのは、4年前にLA地区で開催された講演会である。在LAの著名な日本人を講師に招いて日本経済の現状と回復見通し等について解説したもので、日本人のみならず日本に関心をもつ米国人を含め、多数の聴衆が参加した。このイベントは若尾氏が中心となり企画、運営された。日米間の理解深化に資するものとして、7つの大きい日系団体をはじめ多数の寄付金が集まった。結果的に4000ドルが余ることとなり、これを元に、日米関係の深化に資するイベント支援基金を作ろうということになった。今回のラン

タン・イーストが、USJRFが設立のきっかけとなった。残余資金は4000ドルであるが、NPO設立には5000ドル～6000ドルが必要となる。設立申請手続きは若尾氏知人の弁護士に、また会計も知人会計士に依頼したが、いずれも割安料金にて行ってもらった。これも寄付扱いが可能となるからである。

以下、資金作りの面に焦点を当てて解説する。

2. ファンドレイジングの実践（その1、イベント編）

ランタン・イースト（Lantern of the East）は、主要な芸術イベントだけでも約2ヶ月間の長期開催であるが、ファンドレイジング（資金収集）の為のイベント等を含めると5ヶ月間、ボランティアの活動も含めると1年間に及ぶ。NPOが主催していることもあるが、ファンドレイズは最も重要な部分を占める。また、開催前にイベントを行うことにより、多くの人にランタン・イーストを知ってもらえる事が期待できる。以下は、各種ファンドレイズ・イベントについての解説であり、開催前と後に分けて整理している（表2. スポンサー形態一覧表参照）。

（1）. イベント開催前

キックオフ・パーティ

キックオフ・パーティは、イベント開催の約4ヶ月前である5月6日に、リトル東京の日米文化センター内ドイザキギャラリーにて開催され、主旨説明及び記者会見が行なわれた。パーティーには100名以上のゲストが参加した。アーティスト出身各国の料理を持ち寄り、パフェ形式のパーティーが催された。また、国際的イベントにちなみ、日本から琴と尺八の演奏、韓国の伝統舞踊、アルゼンチンタンゴ、ブルガリアのポップオペラの熱唱、等が披露された。

チャリティー「夕涼みのお茶会」

お茶会チャリティーは、当イベントの趣旨に賛同した裏千家飯沼信子氏が主催したものである。氏が自宅を開放し、自らの手料理とお茶でもてなすという催しである。会費は一人\$30で、約60名が参加した。このお茶会の参加費用は全てランタン・イーストに寄付されている。料理及びお茶の材料費など約3000ドルの出費は、すべて飯沼氏が負担された。飯沼氏は、こうした形で寄付を行った。

チャリティーゴルフトーナメント

ファンドレイジングのためのゴルフトーナメント。多くの企業が賞品を寄付した。ゴルフが盛んなロサンゼルスでのファンドレイジングイベントとして、盛況であった。

（2）. イベント開催後

アートキャンプ・キックオフ・パーティー

アートキャンプ開始を祝うバーベキューパーティー。アートキャンプが行われるエンジェルズゲート・カルチャーセンターで開催された。アーティストがその場で絵を描いたTシャツの販売、会場に用意された大きな白地のキャンパスに誰もが自由にペイントできる企画、等の催し物も織り込まれた。自由ペイントは、子供やアーティストを含む誰もが参加でき、時々刻々変わるデザインの妙に参加者は見とれた。

オープニングセレモニー

展覧会のオープニングを記念して開かれたセレモニーである。「始めに」でも紹介したが、これは、ホテル・ニューオータニのボール・ルームにて行われた。日本国総領事を含む各国の総領事も招かれ、200名が参加する大イベントとなった。韓国や中国の舞踏、和太鼓等、文化交流の催し物も披露され、また今回参加しているアーティストの作品やイベントに協力している喜太郎やマツイケイコのCD等のオークションも開催された。

展示会

展示会は、サンペドロのエンジェルズゲート・カルチャーセンター、リトル東京の日米文化会館内ドイザキギャラリー、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校の3ヶ所で行われた。会場ではプログラム、展示作品のポストカードが販売された。展示会期間中は、週末に、アートを専攻する学生を対象としたディスカッションおよび子供にアーティスト自ら絵を指導するキッズデー等も催された。

今回アートキャンプおよびギャラリーとして使用されたエンジェルズゲート・カルチャーセンター（Angels Gate Cultural Community Center）について若干敷衍してみる。サンペドロの丘の上にあるエンジェルズゲート・カルチャーセンターは、普段は多数の芸術家のアトリエとなっている芸術家村である。元海軍の宿泊地跡を利用したものであるが、坂田画伯を始め50名のアーティスト達がここにアトリエを構えている。ロスアンジェルス港や太平洋を見下ろす広い敷地内には芸術家達のアトリエとなっている建物が何棟もある。芸術家達はそこを借りて創作をしている。今回に限らずアート展も常時開かれており、週末には露店が出るなど開放的な雰囲気である。

このような「ロフト」はロスアンジェルス地区に3ヶ所存在する。この Angels Gate Cultural Community Center の他、LA ダウンタウン南東部の旧倉庫街そしてロングビーチ臨海地区である。ロスアンジェルスは、芸術家が集まる街でもある。

3 . ファンドレイジングの実践（その2、手法編）

次に、ファンドレイズに係る各種手法について見ていく。

(1) . 寄付

ファンドレイジングの基本は寄付金収集である。寄付主の殆どはロスアンジェルス在の日系企業であり、若尾氏に何らかの形で関連している方が多い。寄付の形態としては、パンフレットやプログラムに掲載する広告という形が多かった。これは、税制上損金扱いできることに加え紙面上の大きさにより広告の値段が選べること等によるものである。広告印刷を通じた寄付の提供は、南カリフォルニアの企業だけでなく北カリフォルニアからも寄せられた。もちろん金銭的な寄付もあったが、レストランの食事券やホテル宿泊券、パーティー用の食事を提供する企業もあった。ホテル・ニューオータニは、前述のようにパーティー代の一部を提供した。また都イン・トーキョーは、参加芸術家向けに無料や格安の宿泊代を提供した。但し、一般的には想像以上に企業の財布の紐が固かった、特に期待の大きい日本企業現法からは賛同を得られなかった、ということである。日本の不景気を反映していると言えるのかもしれない。

【寄付関連税制と手続き】

ランタン・イースト (Lantern of the East) へのスポンサー費用、寄付金はすべて税金控除対象となっている。米国では、全国民がそれぞれ個人で税金を申告するシステムとなっているが、寄付金に対しては税金控除が適用される。然るべき団体に寄付する場合、団体から寄付受領証明書の交付を受け税金申告の際にこの証明書を添付することにより、納税分の一定割合が控除される。前述のように、今回のLA地区でのランタン・イースト開催に際し、運営団体の受け皿として“U.S. Japan Relationship Fund Inc. (USJRF、日米友好基金)”というNPO団体が創設された。USJRFは、税金控除が可能となるNPO団体として州政府に申請し認められている為に、寄付金受領証明書を発行することが出来る。筆者(山家)の個人的な体験でも、学校の活動、課外クラブ活動、スクールバス運行等様々な活動においてドネーションの要請がある。また、その都度、寄付証明が必要かどうかをチェックする欄がある。

米国における寄付活動の現状については節を改めて紹介するが、米国では、個人レベルでの寄付やボランティア活動が盛んである。このような税金控除制度は、寄付する者も寄付される者も互いに利益を得ることができる Win-Win の仕組みであると言え、活発な寄付活動を支える大きな要因となっている。上記で触れた弁護士へのNPO申請料も、寄付金として扱う事が出来る為、弁護士にとっては税金控除となるのである。もちろん、全てのNPO団体が寄付金に対し税金控除対象機関となりうる訳ではない。認可を受けやすい分野として教育活動や慈善活動が挙げられる。

また物質的な寄付だけでなくランタン・イースト等への寄付のように、アメリカでは寄付が生活に密着している。市民自らが進んで草の根イベントに協力する姿勢になれるような仕組みを、政府が作っていると言えよう。

(2) . その他

以下の項目についても基本的には寄付であるが、視点の異なる面もあり、独立した形で紹介する。

【ラジオ広告】

日系のラジオ放送局であるラジオパシフィックジャパンは、約10分間のイベント紹介番組を28回にわたり放送した。出演者は、実行委員長の若尾龍彦氏、イベント発起人である坂田英夫氏、スポンサーのヘンリー幸田氏(弁護士)、ロッキー岩本氏(イワモトインシュランス社長)、金井紀年氏(共同貿易社長で当イベント支援実行委員会名誉会長)等で、アートや文化に対するそれぞれの思いを語るという内容であった。また、これはLantern of the Eastのウェブサイト(<http://www.lofte.org>)上のウェブラジオとしても聴く事が出来る。ラジオパシフィックジャパンが、貴重な番組枠をイベント宣伝のために提供したものであり、これも一種の寄付である。

【テレビ広告】

日系放送局であるアサヒホームキャストテレビが放送枠を無料で提供した。土・日曜日の夜、日本語放送時間帯にイベントのコマーシャルが放送された。

【ポスター、カタログ及びパンフレット】

U A J R F (日米友好基金)は、宣伝用のポスター、カタログ、パンフレットを製作したが、撮影は全てボランティアによって行われた。この映像はテレビ広告でも使用した。カタログには参加アーティスト138名の作品を掲載し、一冊30ドルで、3ヶ所のギャラリーにて販売された。参加アーティストには一冊20ドルで5冊購入してもらった。

パンフレットにはスポンサーの広告の他、ランタン・イーストの意義に賛同した政治家から寄せられたメッセージも掲載した。これらにはジェーン・ハーマン連邦下院議員、グレイ・デイビスカリフォルニア州知事、ジェームス・ハーンロスアンジェルス市長、LA地区選出日系加州議員ジョージ・ナカノ氏、在ロサンゼルス日本総領事の河野雅治氏をはじめ各国の総領事らが含まれる。こういった政治家等からのメッセージは、イベントの重要性、公共性の証として認識される場合が多く、ファンドレイジング活動を行う際、非常に有効である。今回も主催者側はそれを痛感しており、より早い段階でのメッセージ取得を反省点として挙げている。特に、途上国の人達にはメッセージ性が強いということである。

【ポストカード】

参加アーティストの中から作品をポストカードに印刷したい人を募り作成。1枚1ドルとしてギャラリーにて販売した。

【印刷代】

ポスターとフライヤーの印刷費用は、印刷会社の厚意により、寄付金とされた。先に、日本大手企業の寄付金が集まらなかったと記したが、その分は経費節減対応を余儀なくされることとなった。その最大のものは、この印刷代の寄付金化である。

表 2 . スポンサー形態一覧

| | 後援金及び スポンサー料 (1口) | |
|--------------------|-------------------------|--|
| イベント後援 スポンサー | \$5,000~\$10,000 | 1.以下のものに後援会社及び団体の名前及びロゴの提示。 広報印刷物 メディア媒体資料(アーティスト参加 31カ国のマスコミに配布) レセプション会場及びアート展示会場(3ヶ所)のバーナー内 ラジオ番組 イベント(ゴルフトーナメント等)での後援会社名告知 2.製作プログラム内 1/2 ページ広告 3.ラジオ広告 4.ウェブサイト内リンク広告 |
| アートキャンプ後援 スポンサー | \$10,000 | イベント後援スポンサーと同様の内容プラスアートキャンプで製作された作品に対する優先購入権 |
| ラジオ番組 スポンサー | \$300 | ラジオ出演(インタビュー形式によりスポンサー会社または団体の宣伝) |
| プログラム広告 スポンサー | \$100~1,000 | 6000部印刷する配布プログラムへの印刷広告。展覧会開催期間中、3会場においてお客様に配布。 |
| マネーファウンド スポンサー | \$500~ | イベント運営のための基金。預かったお金はイベント終了後に金利(年率10%計算)を含め返済される。 |

| | |
|-------------------|--|
| フード&ドリンクスポンサー | パーティー、アートキャンプ、展覧会場等への商品提供 |
| オークションスポンサー | オープニングセレモニー(ファンドレイジングプログラム)の際に行われるオークションへの商品提供 |
| レストランエクスチェンジスポンサー | 商品券の提供 |
| トラベラーズスポンサー | 世界各地から集まるアーティストの航空券の提供 |
| ゴルフトーナメントスポンサー | ファンドレイジングプログラムであるゴルフトーナメントの商品の提供 |

4 . 収支バランスおよびスポンサー形態

これまで、2002年ランタン・イーストの活動状況やそれを支えるNPOの資金収集策について解説してきた。本項では、参考までに、それらの支出表、収入表およびスポンサー形態を示した表を掲載する。

表3 . ランタン・イースト収支表

| 【収入】 | | (単位：ドル) |
|----------|--------------------------|------------------|
| 印刷物 | カタログ | \$ 1,590 |
| | ポスター | \$ 0 |
| | チラシ | \$ 0 |
| | プログラム | \$ 12,125 |
| | 絵葉書 | \$ 2,858 |
| イベント | キックオフ・パーティー | \$ 0 |
| | バーベキューパーティー | \$ 1,247 |
| | アートキャンプ・キックオフパーティー | \$ 1,981 |
| | ゴルフトーナメント | \$ 7,340 |
| | オープングレセプション(ホテル・ニューオータニ) | \$ 11,594 |
| | オープングレセプション(各展示会場) | \$ 0 |
| | オークション | \$ 4,090 |
| | お茶会 | \$ 1,940 |
| | アーティストウェルカムパーティー | \$ 0 |
| その他 | ラジオスポンサー | \$ 4,100 |
| | イベントスポンサー | \$ 10,000 |
| | ドネーション | \$ 4,136 |
| | ギャラリードネーション | \$ 1,424 |
| | 作品の販売 | \$ 2,450 |
| 計 | | \$ 66,875 |

(注) 上記以外に多くの物品提供があったが、これは含んでいない。

【支出】

(単位：ドル)

| | | |
|----------|---------------------------|------------------|
| 印刷物 | カタログ | \$ 12,050.00 |
| | ポスター | \$ 0 |
| | チラシ | \$ 0 |
| | プログラム | \$5,730 |
| | 絵葉書 | \$ 6,040 |
| | 撮影会 | \$ 1,174 |
| イベント | キックオフ・パーティー | \$ 2,373 |
| | バーベキューパーティー | \$ 701 |
| | アートキャンプ・キックオフ・パーティー | \$ 372 |
| | ゴルフトーナメント | \$ 4,730 |
| | オープニングレセプション(ホテル・ニューオータニ) | \$ 9,197 |
| | オープニングレセプション(各展示会場) | \$ 40 |
| | オークション | \$ 322 |
| | お茶会 | \$ 69 |
| | アーティストウェルカムパーティー | \$ 344 |
| | 打ち上げ | \$ 568 |
| アートキャンプ | ホテル | \$ 4,639 |
| | エアチケット | \$ 3,300 |
| | 食費 | \$ 1,733 |
| | 移動代(レンタカー等) | \$ 1,378 |
| | アート備品 | \$ 1,163 |
| | その他 | 4348 |
| その他 | ミーティング | \$ 63 |
| | メーリング関連 | \$ 1,800 |
| | コピー、オフィスサプライ | \$458 |
| | その他 | \$ 1,186 |
| | ウェブホストその他 | \$ 679 |
| | 立替え | \$ 3,000 |
| 計 | | \$ 66,457 |

(注) 上記以外に多くの物品提供があったが、これは含んでいない。

5 . ランタン・イーストにみる NPO 活動の留意点

2002年ランタン・イーストは、開催史上最多の参加者を集め、またボランティアの協力等により成功裡に終了した。このNPO活動を振り返ってみると、運営面や資金収集面で全てボランティアで行うやり方は、試行錯誤の連続であり、当初描いた見通し通りとはいかなかった。ボランティアや寄付に頼る運営は、多くの教訓及び課題を認識する場となったことも事実である。以下は、NPO参加者の感想、感慨を踏まえた留意点の整理である。期待(当て)が外れた点、予想以上の成果があった点、に分類する形で整理を試みる。

【期待通りにいかなかった点】

予想した当てが外れた最たるものは、前述のように、日本企業現地法人の寄付が殆ど集まらなかったことである。景気の影響が大きい、時間の制約もあり企業に内部説明するに足る理屈を十分に準備できなかったこともある。企業の担当者がこだわった点は、イベントの意義、米国現地法人として寄付することの効果、毎年開催されるのかという継続性である。同じ地域でのイベントの継続は、寄付した者に寄付の効果をはっきりと見て取れるという点から非常に効果的である。また、分かり易いイベントの理念や趣旨を構築することが非常に重要であり、その面の入念な準備が必要である。

最終的には、デービス州知事やハーンLA市長を始めとする要人からのメッセージを取り付けることができたが、もう少し早めに入手できれば、説得力を増したことができ、違った展開となる可能性が高かった。寄付集めは、これらのメッセージ入手後の手応えが違ったという。特に、途上国関係者には効果的である様である。

また、地元自治体からの資金協力は得られなかった。米国では、文化に対する政府の関与は、PR等の面では有り得ても、資金的には馴染まない。米国では民間ファンドが多く存在しこれにアプローチすることが考えられる。EASTという言葉に示される東洋の文化・芸術の紹介に力点を置く趣旨のなかで米国ファンドをどう説得するか、という課題もあった。一方で、10年間続いているという信用は大きな財産であり、ファンドレイジングのために軽々に理念を変更することは逆効果になることも予想される。いずれにせよ、理念をどう構築しアピールするかはベースラインである。

多くの国からアーティストが参加することから、当初はそれぞれの国のコミュニティの代表が集まって運営をする計画を立てていたものの、結局日本以外の国からは運営面の参画を殆ど得られなかった。特に、発起人国で最多開催国であり、また日系人を上回る現地コミュニティをもつ韓国人の参画を得られなかった。期待していたLA在住の韓国人芸術家が、所用で長期間LAを離れていたという不運もあった。また、参加した芸術家達にもある程度の運営協力を期待したが、芸術家特有の価値観もあり、理解を得るのに時間を要した事に加え、芸術家達のほとんどが自国のコミュニティと密接に関わっていない為に接触を図れなかったという誤算もあった。

【予想以上の支援を得た点】

一方、予想以上の支援としては、何よりも日本人ボランティアの協力である。協力者は50人にも上り、資金収集を含めた多くのイベント運営を手掛けた。ただ、多忙を極めた。この規模のイベントを実行するには最低2人の専従が必要であった、との反省がある。また、印刷会社は多額のパンフレット印刷代分を寄付した。裏千家の飯沼信子氏は、お茶会開催を通じた寄付を行った。

前述のように、州政府やLA市の首長や各国LA総領事を始めとするビッグネームがサイン入りの祝辞を寄せてきたが、これは資金協力の説得材料としても大きな効果があった。ただ、より早期に入手できればとの反省が伴う。イベントのハイライトである芸術家歓迎レセプションでは、関係各国の伝統芸能がアトラクションとして披露され、会場を盛り上げるとともに集客に大いに貢献した。大口の企業寄付は集まらなかったものの、小口の企業や個人からの寄付はある程度積み上がった。寄付を考える際日米の税制は常に比較される。米国の方が、かなり容易に所得税控除となりうる。



ランタン・イースト、キックオフ・パーティ準備ボランティア



コマーシャル及びカタログ映像の撮影ボランティア

第3節 米国におけるNPO活動と寄付

当節では、米国のNPOの仕組みを中心に、寄付やボランティアについても触れる。

1. 特徴

アメリカではNPO団体が多く存在し、ボランティア活動も盛んである。1999年現在の税控除が認められているNPO団体は77万強存在する。この統計には宗教関係の団体や地元の草の根団体は含まれていない為、その数はさらに多くなる。日本では、最近では活発になってきているもののまだまだ「特別な活動」であり、自ら意識して活動しない限りボランティアや寄付をする機会がない。アメリカでは意識せずとも、様々な形で生活に組み込まれている。また日本では、「NPO」という言葉はボランティア活動のみをイメージしがちであるが、米国ではボランティア活動と同程度にファンドレイジングが、すなわちいかにして活動する為の資金を収集するかが重要である。米国では、ドネーションやファンドレイジングに絡む資金の流れは膨大でかつ複雑である。このような環境の下で、米国ではNPO活動や寄付は「ビジネス」としての側面をも有しており、巨大な「市場」を形成している。

「ビジネス」である例として、アメリカでは寄付金収集代行業が存在する。NPO団体を作っても、寄付金が集まらなければ活動は出来ない。いざ寄付金を募っても思うように集まらないことがある。こうした場合、収集ノウハウを持つ代行屋に頼めば効率的な寄付金収集が可能となる。

2. ファンドレイジングの資金源と使途

NPO団体として活動をする為には、ファンドレイジング(資金収集)が不可欠である。NPO団体の理事になる(お願いをする)ときにまず求められるのは、資産がある、またはお金を集める能力がある事である。

ランタン・イーストでも様々な形でファンドレイジングを行っているが、ファンドレイジングの形態は様々である。例えばオークションは寄付金集めとしてよく利用されている。日本ではオークションというと安く購入出来るイメージもあるが、こちらではファンドレイジング目的のオークションの場合、価値以上で購入される場合も多い。

表4及び表5は、2001年度の主な寄付金提供者および使途を示したものである。提供者では、個人が1600億ドルと約8割を占め、圧倒的な存在を示している。以下財団(12%)、遺贈(8%)、企業(4%)となっている。企業の寄付に頼る日本と比べて、コントラストを描いている。米国では個人が寄付をする機会が日本と比べて多いが、これは生活をしていて十分に実感しうる。寄付がコミュニティ建設に直接関わっているからである。一方、寄付金の使途をみると、宗教、教育、社会事業が大きいウェイトを占めている。

表4 . 2001年度 主な寄付金提供者

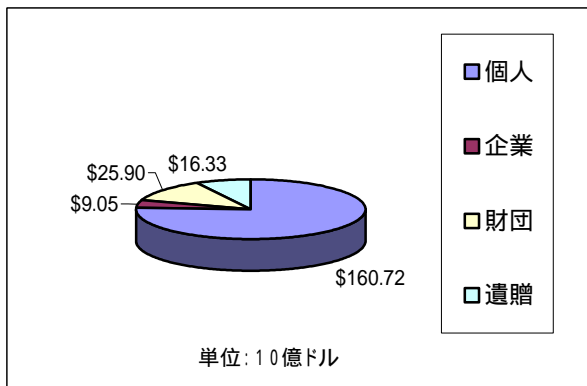
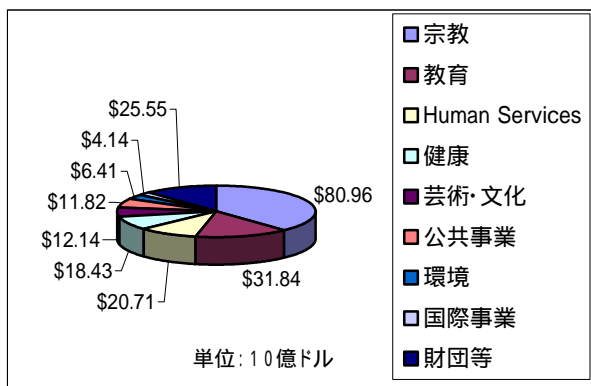


表5 . 2001年度 寄付金の使途



出典 : American Association of Fundraising Counsel

以下、寄付金に関し米国で主要な役割を担っている「個人」、「財団」、「教育」に焦点を当て、若干の解説を試みる。

【個人】

前述のように寄付金提供者として「個人」は圧倒的なウェイトを占め、生活や経済活動に根付いている。個人が寄付する際の最も身近な例は子供の教育に係るものであろう。

米国の教育は、各州が強い自治権を持っており、さらに州内の細かいディストリクトが使用する教科書を決める等、地域によって教育方針は様々である。当然学校の整備も地域によって差異が生じることになる。学校への寄付を惜しまない、あるいは裕福な層の住む地域にある学校は設備が整う。しかし、寄付金の集まらない地域の学校は設備が整わない。教育のレベルは治安の良し悪しに直結する。このように、寄付は自分の所属するコミュニティが住みやすくなるか否かに、密接に関わっている。また、富を得た個人の中には、財団を設立したり自宅を開放しチャリティーパーティーを開催する等、社会に還元する人が多い。

個人がNPOに寄付をするもう一つの身近な例として、救世軍(Salvation Army)がある。救世軍は金銭の他、物資の寄付を受け入れている。各地にオフィスがあるので直接品物を持っていくことも出来るが、廃車同然の動かない車等も各部品は使えるということで、牽引車で引取りに出向いてくれる。車を引き取る際、ブルーブック(中古車基準価格)での車の価値が提示された寄付証書を発行してくれる。この証書を税金申告の際に一緒に提出し税控除を受けるという仕組みである。アメリカは大量消費社会であり使い捨て社会の面も有しているが、一方で、不要になったものを必要な人や団体に渡すリサイクルシステムも存在するのである。

【財団】

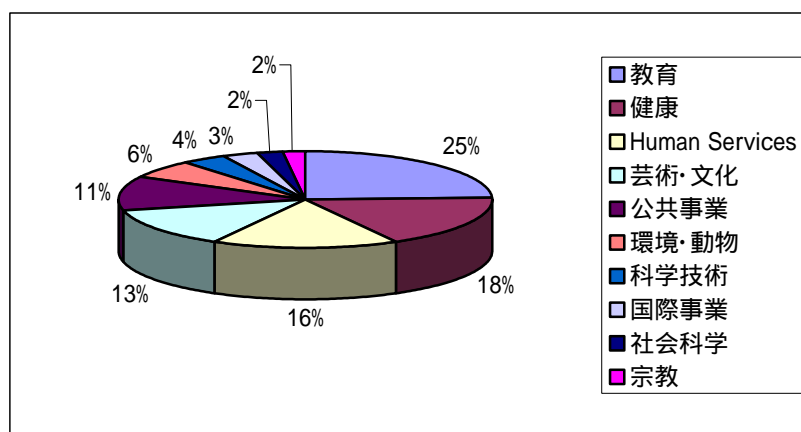
寄付金の関係者として財団は大きな存在を誇っている。提供者としては金額ベースで約12%を占める2番目の地位にある。また使途先としても名称は様々ながら財団形態をとる場合が少なくない。

米国では、多くの財団がNPO団体や研究者等に対して助成を行っている。財団の多くはNPO等に対する助成金枠を持っており、NPO等は財団からの助成金を当てにしている。財団の設立の理由としては、名誉の獲得や、社会還元、コミュニティへの貢献の他、財団もNPOの一種である事から節税対策など様々である。日本でもよく知られている財団としてロックフェラー財団や、カーネギー財団などがある。財団の理事会では、目的に適う寄付先があるかどうか、常に検討がなされている。

低所得者ホームの運営や、留学生ホットラインなどを開設している「リトル東京サービスセンター」というNPO団体がLAダウンタウンのリトル東京にある。ここでは、約70名程いる団員の約9割が、財団へ助成金を申し込む手続きをしている。財団側は、「リトル東京サービスセンター」の活動が、助成金の対象であるかどうかを審査するが、無事通れば助成金が交付されることになる。センター職員の中には、50万ドルのプロジェクトを手掛ける人もいる。このようにNPO活動において資金収集の占める割合は高いのである。

表6は、1999年度の財団における助成金の主な使途である。教育が25%でトップに位置し、以下健康(18%)、社会事業(16%)と続く。芸術・文化は4番で13%である。寄付金全体の使途と比較した場合、助成金の芸術・文化への使途の割合は高い。

表6 . 1999年度 財団における助成金の主な使途



出典：“Giving U.S.A. 2001”, American Association of Fund-Raising Counsel

【教育】

寄付金の使途として教育の占める割合は高く、15%と第2位である。以下は、大学運営に関し寄付金が果たす役割の具体例である。

アメリカにおける学校の運営は、ファンドレイジングが欠かせないものとなっている。学校の運営の為に寄付金を募り、また学校自らが奨学金等の為の基金(ファウンデーション)を設立するという動きが活発である。南カリフォルニアのクレアモントにあるクレアモント大学はポモナカレッジなど7つの大学で構成されている。同大学は、10億ドルを超える基金を有しているが、大学の運営費の約2/3がこの基金から賄われている。基金のもととなる財産はポモナカレッジが所有する膨大なアセットである。こうした豊富な寄付金のおかげで低廉で充実した教育が可能となり、全米より有能な学生が集まってきている。パサデナには、アート・カレッジ・オブ・デザインが立地している。ここの正面玄関近くに、寄付者の名前が寄付金額別に掲げられているプレートが存在する。左側が最も高額な寄付金を提供した者の名前で右にいくほど小額になっている。若尾氏が当カレッジを訪ねた際、学長は、「少しでも左にずらしていくのが、学長である私の仕事なのです。つまり資金集めが何よりの使命なのです。」と、ユーモアを交えて語ったそうである。ちなみに、このカレッジの理事の一人は、ピバリーヒルズにある有名なレストランのオーナーである。

筆者の知人で著名な米国の大学教授も、教授の仕事としてファンドレイジングは極めて重要と強調している。米国の大学では所要研究費に占める寄付金の割合は高く、教授は企業等と交渉し研究費を拠出してもらう。教授の研究するテーマが、企業にとって今後有益になる可能性のあるものであれば、研究費用を寄付し、企業側は研究によって得られた成果を企業で使用させてもらうというような Win-Win の仕組みが成り立っている。いくら学術的知識が豊富であっても、資金集めが出来ない教授は研究が出来ないという事になる。また、寄付で集めた研究費の一部は、大学側に上納されるしくみになっている。

3 . N P O 設立の申請

N P O 団体を作る場合、州政府へ設立認可申請を行うこととなる。税金控除対象となる N P O は 5 0 1 (C) - 3 と呼ばれる条項に基づいている。税金控除が出来る N P O として認可される為には厳しい審査があり、その審査は年々厳しくなっている。最近ではチャリティーや教育関連の N P O が認可されやすい。また専門の弁護士に申請を依頼するケースもある。その場合依頼料が発生するが、依頼料もまた税金控除対象の寄付という形となることから、弁護士も割安で引き受けてくれる事が多いようである。

認可された後は、N P O 団体として然るべき活動を行っているかが厳しく審査される。活動及び会計に関する書類を毎年提出し、またいつでも書類を提示出来るよう用意しておかなければならない。N P O としての活動や資金の流れが不相当と指摘された場合、税金控除の認可を取り下げられる。その為に C P A (会計士) に会計全般を依頼する必要があり、またそうした資金も発生する。N P O の Board of Directors としては「お金がある人またはお金を用意する事の出来る人」が必須条件である、との指摘は多い。

4 . 米国NPO活動を考える際の留意点

当節では、米国NPOの活動について、ドネーションやファンドレイジングが非常に盛んであることを強調した。これをもって、一方的に米国は進んでおりそれとの対比で日本は遅れている、と決めつけることには留意を要する。米国は西欧からの移民により建国された国であり、その生い立ちからして、自らのコミュニティは自らの手で作り上げ守っていく、という発想が強い。州政府は独立性が強い。教育は消防・警察等に関してもきめ細かいディストリクトに分かれており、人々は住みたいと思うコミュニティを選択し積極的に参加する傾向が強い。

また、西欧の歴史を遡れば、長い間領主に搾取される農奴・民という構図が存在した訳で、自らのお金は自分の納得する用途に使いたいという本能がある、との指摘もある。さらに、宗教の教義上、ドネーションが義務付けられている場合が多く、本能的な行為となっている。ドネーションおよびファンドレイジングが盛んである理由はこうした社会背景があることに留意すべきであろう。

終わりに代えて

【文化イベントに見る日米韓間の比較 - 地域・政府との関わり合い - 】

ランタン・イースト (Lantern of the East) は今回で10回目となる。発起人は P. Kemraje(インド)、Lee Kye Song(韓国)、上條陽子(日本)、そして坂田英夫という4人の芸術家達である。発起人4人のうち2人が日本人であるが、それにも拘わらず日本での開催は1度だけである。過去の開催地と回数を列挙してみると、韓国が6回、インドが1回、ロスアンジェルスは今年を入れて2回となる。韓国での開催が多い理由や各国の対応振りについて、今次主催者側あるいは一部の参加者は以下のように解釈する。

韓国は、政府あるいは政治家が芸術イベントに関わる度合いが大きい。芸術に対する興味と理解が高いとも言えるが、一方で、政治家としてアピールする材料として利用している面もありそうである。実際、韓国で開催される場合、資金の殆どは政府によって拠出される。また、某日本人の参加アーティストは、韓国開催時の印象として、コミュニティやボランティアのサポートが印象的と語る。例えば、アートキャンプの会場に、地域の方が差し入れとともによく顔を出し、イベントを盛り上げてくれるとのことである。また、物価が安い点も海外アーティストを呼び易い一因となっている。

今回の開催国となったアメリカの場合は、政府の呼びかけで芸術祭が行われる事はほとんど無いという。また、金銭面での支援は期待できない。芸術や文化は政府が関わるべきではないという意識が強いのである。ただ、一般に、コミュニティが自分達の住む地域を盛り上げようとする意識は高い。実際、今回の芸術イベントも、ボランティア活動を主に商品や場所の提供等を含めて、コミュニティの寄付や協力により成り立っていると言える。

日本で芸術祭が行われにくい理由としては様々な意見がある。自治体等政府に予算が無い訳ではなく、実際問題としてその資金を当てにする場合が多い。但し、自治体等に要請しても実現化までに時間がかかる、複数年の継続が条件つけられる等の課題があり、ハードルが必ずしも低くないとの印象がもたれている。また、日本国民全般的に芸術にお金を出すあるいはボランティア活動を行おうとする気風が乏しい。よく指摘されることであるが、税制の問題もあり、企業からの寄付が経済情勢に左右され易く不安定である、等の理由が挙げられる。先の日本人アーティストの言では、共稼ぎが多く忙しいのかも知れないが、アートキャンプに顔を出しアーティストと交流をする人が極端に少ないとのことである。坂田画伯は、「欧米では芸術作品が家具の一部として生活に組み込まれているが、日本ではまだそうした習慣に乏しい。」と語っている。

【我が国への示唆 - 文化イベントとNPOの関わり合い - 】

手詰まり感のある我が国の地域振興を考える際、地域が持つ伝統文化や芸能を見直し利用すること、また文化に理解のある地域として定期的な文化イベントを開催することが、その方策としてありえよう。これは、外国人旅行者を呼び込む上でも有効と考えられる。

外国人の来場を見込む場合は、参加型のイベントを催すことが有効である。

米国では、日本食が様々な意味で評価され日本食レストランは隆盛を誇っている。ロスアンジェルスのレストランを紹介している専門誌「Sushi-&-Tofu」の英語ホームページには、月20万もの訪問者がある。日本アニメは高い評価を受け、2002年12月には週刊コミックの英語版も定期発行が実現された。LA地区では、能、狂言等の公演は盛況で、茶道、華道等にも注目が集まっている。

一般に、文化イベントの運営に関し、途上国は政府や自治体が有力な資金提供者である。先進国である米国は、文化は市民が創造するものという理念の下で、ボランティア活動やNPO主催の集金収集の果たす役割が大きい。日本は、文化活動に関しては資金面を主に政府の役割が大きい。但し、財政上の問題や人々の意識変化を背景として、ボランティアやドネーションの役割は高まっていくことになる。2002年「ランタン・イースト」は、ボランティア精神をもった普通の人々が、政府の資金補助無しで大きな文化イベントを支えた一つの事例である。情熱やリーダーシップをもったキーパースンの存在、イベントの意義のアカウンタビリティ、寄付税制に係る考え方の整理、政府の効率的な支援方策等、今後の我が国地域社会活性化を考える際に参考となるものと思われる。

日本政策投資銀行 ロスアンジェルス事務所
山川光子、山家公雄

参考資料 1 - カタログ表紙



参考資料 2 - イベント支援者、企業及び団体一覧（寄付、ボランティア）

Special Thanks

Thank you very much for your cooperation!

Event Sponsor

Mr. & Mrs. Noritoshi Kanai
Mr. & Mrs. George Anstani

Supporting Organizations

Angels Gate Cultural Center
Art Collective
California State University Los Angeles Fine Arts Gallery
Los Angeles Center for East Asian Studies
City of Los Angeles
City of Torrance
Consulate General of Argentina
Consulate General of Egypt
Consulate General of Japan
Consulate General of the Republic of Korea
Consulate General of Lebanon
Consulate General of New Zealand
Consulate General of Peru
Consulate General of Thailand
Japan America Society of Southern California
Japanese American Cultural & Community Center
Japanese Chamber of Commerce of Southern California
Kansai Club
Korean American Federation of Los Angeles, Inc.
Korean American Foundation
Korean American Museum
Korean American Chamber of Commerce L.A.
Korean Artists Association in Southern California

Korean Cultural Center
Latino Art Museum
Los Angeles County Chicano Employee Association
Pacific Rim Chamber of Commerce
Palm Verdes Art Center
Thai Art Council U.S.A.
UCLA
Visual Artists Guild

Special Support

Mr. Keiko Matsui, Internationally acclaimed Jazz Pianist
Kisaro, a six time Grammy nominated musician
Koyo Graphic International, Inc.

Media Sponsors

Aashi Homewares Corporation
Cultural News
Lighthouse
Radio Pacific Japan
TEE UP GOLF MAGAZINE
U.S. Japan Business News, Inc.

Radio Sponsors

Business Cafe L.A., Inc.
Taco Honda
Isamoto Insurance Services
Mr. Henry Koda
American Fish & Seafood Company
Miyako Oriental Foods, Inc.
Mutual Trading Co., Inc.
Ogawa & Co., Inc. Ogawa Realty & Investment Group

Restaurant Rikudan
Mr. Toshihiko Tamada
Tajiri U.S.A., Inc.
Takara Sake USA, Inc.
Transpower Technologies, Inc.
Utsuhira U.S.A. Inc.

Fund Raising Golf Tournament Sponsors

At Home, Inc.
Bridge U.S.A.
Desert Hills Premium Outlets
Dr. Sacco
E. Brewer Trading
Gemma-Koco
Mr. Tadashi Hayakawa
Mr. Bobi Hirashima
Hiarama America, Inc.
Holiday Inn Torrance
House Foods America Corp.
Mr. Saikou Inuma
ES Translations, Inc.
Isamoto Insurance Services
Mr. Yuji Isanaga
Japan Optical Usa
K. Ogawa & Co., Inc.
Karaoke Juli
Mr. George Kikuta
Manchen, Inc.
Maximo's Caffe / Bakery
Miyako Oriental Foods, Inc.
TEE UP GOLF MAGAZINE
Morinaga Nutritional Foods, Inc.
Nippon Express USA, Inc.
Nissin Foods (U.S.A.), Inc.

Nowir USA, Inc.
 Ogawa & Co., Inc. Ogawa Realty
 & Investment Group
 Olympic Shop
 Daifuku Foods Inc.
 Daube Shoten
 Pentel of America, Ltd.
 Pioneer Electronics (U.S.A.), Inc.
 Radio-Pacific Japan
 Ms. Chako Ryu
 Mr. Hideo Sakata
 Sea Empress Seafood
 Restaurant
 Seahorse Golf Club
 SSK America, Inc.
 Stanley Electric Sales of
 America, Inc.
 Takara Sales USA, Inc.
 Transo Circle, Inc.
 Unishome USA, Inc.
 Yoshinoya West, Inc.
 Zojirushi America Corporation

Special Thanks

Calpis U.S.A., Inc.
 Central Books
 Crea Floral School
 Development Bank of Japan
 Gerko Club
 Grapple
 Mr. Louis K. Ito
 Lifestyles Design Group
 Maeda-en U.S.A.
 Mygo U.S.A., Inc.
 Daifuku Foods Inc.
 Daube Shoten
 San Antonio Winery
 Senior Net Learning Center in
 Torrance
 Starbucks Coffee
 Suzhi Boy
 Trader Joe's
 Ms. Yoshie Makino

Fund Raising Charity Evening Tea

Mrs. Nobuko Inuma
 Mr. Seikou Inuma

**Lantern of the East
 Organizing Committee**

Honorary Chair: Noritoshi Kanai
 Chair: Ted Wakao

Committee Members

Paul N. Dojo
 Masashi Kawashima
 Mike Misawa
 Lili Muru
 Kazuhiko Ono
 Hideo Sakata
 Yuji Sato
 Akiko Sakka
 Toshihiko Tamaki
 Shinya Tamada
 Saburo Teuchida
 Fumie Wakao
 Akiko Yasukie
 Nobu Yuki
 Diana Shui-lu Wong
 Karel Tsassananchalee
 Bok-Lim Kim
 Mark George Justiniani
 Matthew W. Thomas, Jr.
 Monticelli Miller
 Nancy Uyemura
 Norma Jean Squines
 Renee Amati
 Tetsuchi Hayakawa
 Shari Maghinby

Volunteers

Takashi Adachi
 Junzo Arai
 Michio Fuchino
 Heiko Handa
 Mie Hayashi
 Bob Hirahira
 Mocharu Ijima

Hiroshi Ichimura
 Teruko Kaname
 Masami Kawabata
 Kazuko Kinoshita
 Junko Kishi
 Naoko Kizacka
 Chikara Kurahashi
 Michiko Matsumaga
 Yukiko Matsuyama
 Anako Mizumoto
 Toshihiko Mochizuki
 Kaiko Mura
 Eri Nabeshima
 Kariy Nakai
 Yoshino Nihei
 Yukiko Okabe
 Yoshiko Otaki
 Masashi Otaubo
 Michael Payton
 Hideyuki Sagara
 Tamiko Sakata
 Mitsuasa Sakka
 Sachiko Sato
 Yoko Shibata
 Mayu Shuto
 Makoto Takahashi
 Emiko Takimoto
 Hiroshi Takizawa
 Toshihiro Tanabe
 Minako Tanaka
 Dan Yamagata
 Teruko Yamagishi
 Fubiko Yamamoto
 Takako Yamagisawa
 Fuzuko Yasokawa
 Noriko Yoshida

Cover Design

Yar Design

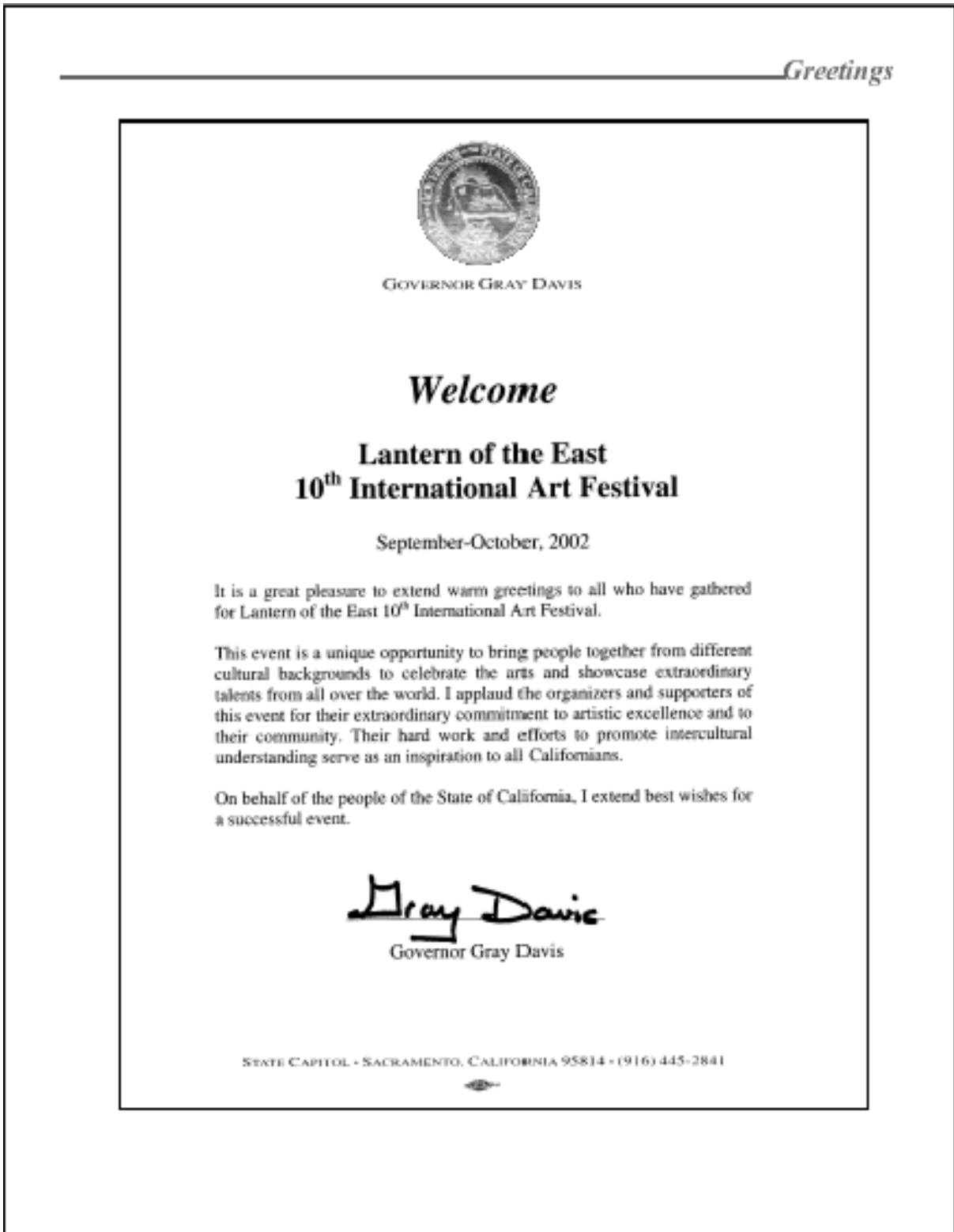
Logo Design

Jesus Bericio, Jr.

Design & Printing

Parachute America
 Jeff Yamazaki
 Naomi Adachi
 Kazuko Shinoka

参考資料 3 グレイ・デイビスカリフォルニア州知事からのメッセージ



参考資料 4 ジェームス・ハーンロスアンジェルス市長からのメッセージ

Greetings



James K. Hahn
Mayor



Greetings

***The 10th International Art Festival
Lantern of the East***

On behalf of the City of Los Angeles, I extend a warm welcome to the 10th International Art Festival, Lantern of the East.

This Festival provides a mutual understanding and cooperation from people of various backgrounds and cultures to promote a universal language of art. There will be fabulous displays of art works from 28 countries at three galleries in Los Angeles. I applaud your efforts to promote art as a means to discover oneself and as you nurture and inspire future young artists.

While in Los Angeles, I hope that each of you will have an opportunity to enjoy our city and experience our great hospitality. Los Angeles is a wonderful place for entertainment, recreation and cultural appreciation. We hope you enjoy your stay in the City of Angels!

Best wishes for a spectacular art festival!

September 11, 2002


JAMES K. HAHN
Mayor



参考資料

“Giving U.S.A – The Annual Report on Philanthropy for the Year 2001”, American Association of Fundraising Counsel, Inc.

インタビュー先

若尾龍彦氏

坂田英夫氏

向井勝實氏

Lee Kye-Song 氏